論　文

山村地域における伝統的景観への住民意識
ー京都市久多地区を事例としてー

岩松文代*

Villagers' consciousness of a traditional village landscape in a mountain village
— A case study in Kuta, Kyoto City —

Fumiyo IWAMATSU*

本研究では，高齢化の顕著な山村地域である京都市左京区久多地区を事例に，現在でも多く残る茅葺き民家を中心とした伝統的景観への住民意識を山村問題の現状との関係に着目して考察した．当地区の茅葺き屋根は近年減少の過程を辿っているが，住民は茅葺き屋根に代表される地区の伝統的景観に対して愛着や価値意識を持っている．現在のような住民意識が形成されてきた背景には，①現在の生活に危機感を持ち，過去の活気ある時代と現在を比較することや，②徐々に増加してきた観光客や他出した次世代の評価（外部評価）を認識することといった要因があることがわかった．当地区の住民はこれまで茅葺き民家を景観対象としてよりも生活そのものとしてとらえてきたが，現在では伝統的景観としての意識が高まりつつある段階にあると考えられる．ただし，住民にとって地区の最優先の課題は山村問題の解消であるため，景観保存は第一には考えられず，景観の保存施策に対しては，次世代の就業機会が生れる効果を期待する．今後は，住民が徐々に持ちつつある山村景観への客観的な認識が，民家の継承者である他出した次世代の意識や行動に及ぼす影響が注目される．
キーワード：伝統的景観，住民意識，山村問題，茅葺き屋根，外部評価

This paper examines a mountain area within the environs of Kyoto City, Japan, that has a record of social problems connected with depopulation and the aging of the population. The area, known as Kuta, is characterized by a traditional landscape that includes numerous thatched houses. However, these distinctive rooves are decreasing in number. In this study I examined the villager's consciousness of their traditional landscape in relation to the social problems associated with this area. The results of the interviews and questionnaires, which were completed both by villagers and by some who had moved away, showed that many maintained an attachment for the traditional regional landscape with its thatched houses. I suggest two reasons to account for this. First, they are concerned about the social problems that exist in this area, and by maintaining an attachment for this traditional landscape they express their sense of loss of a more dynamic community of the past. Second, they recognize other people's interest in this landscape; there has been an increase in the numbers of tourist. Nevertheless, they consider their social problems to be their most pressing concern rather than conservation of the traditional landscape. They anticipate that designation as a preservation area will create new jobs and that this in turn will lead to population regeneration. It is worth examining how the mentality of the villagers affects subsequent generations and how it influences their actions with regard to landscape preservation.
Key words: traditional landscape, villagers' consciousness, social problems in mountain villages, thatched roof houses, other people's value consciousness

1．研究の背景と目的

伝統的な景観を残す山村は，グリーン・ツーリズムのような都市住民の観光の場として評価されるようになり，古い民家の価値が認められて文化庁の伝建地区(注1)に選定されるなど，近年では山村外部からますます注目されている．一方，山村内部においては現代でもなお一層，山村問題が深刻になっており，景観や民俗の継承のあり方を検討するためには過疎化や高齢化，生活基盤の整備状況などの実態をふまえて住民意識を探ることが重要である．茅葺き民家の保存への住民意識については，伝建地区への合意形成における観光事業の実現可能性との関連（岩松ら　2000）や集落外部との関わりの影響（岩松ら　2001），交流を伴う観光に際しての町外からの見られ方の影響（前田ら　2001）があることなどが指摘されている．しかし，景観保存に対するより根本的な住民意識を考察するためには，景観保存への取組が提案される以前の段階にある地域を対象とした研究が必要であ

* 京都大学大学院農学研究科森林科学専攻
* Division of Forest Science Graduate School of Agriculture, Kyoto University

ると考えられる．

本研究で対象とする久多地区は，京都市左京区の最奥地に位置する高齢化の顕著な山村である．周囲は山に囲まれ，清流の流れる小盆地に水田と茅葺き民家群が佇む伝統的な山村景観が残され，マスコミからは日本の原風景，京の山里，かくれ里などと紹介されるが，とくに景観保存を目的とした施策は講じられていない．

地区の観光業には，キャンプ場や個人民宿などがあるが，目玉となる観光対象はみられず，一般的な観光地とはいいがたい．地区の民家や田畑，祭りといった住民の生活の姿は，観光客にみせるためではなく，住民自らの豊かな暮らしのためにつくってきた結果であると思われる．ただし，近年では茅葺き民家を目的とする写真家や画家，花笠踊りの見物客が入りこみ，盆踊りに観光客が混ざるなどの変化がみられる．また農林作業を減らす家，生活の拠点とされない家，茅葺き屋根をトタンで覆う家が増加し，山村の生活文化が変化する傾向にある．当地区は，全国的にみても茅葺き屋根がまとまって残存している希少な地区であり，その点においては山村における生活様式の伝統を継承してきたといえるが，今日ではひとつの転換期にきていると考えられる．

本研究の目的は，現在，生活の変化過程にある久多地区を事例に，景観を特徴づける茅葺き民家を中心とした山村の伝統的景観への住民意識を山村問題の現状と関連させて考察することである．本論文の構成は，次の第2章で調査方法を，第3章では調査地の社会状況と茅葺き民家の減少実態について述べる．そして，第4章では住民意識について，地域の変化による要因と地域外からの評価による要因という角度から検討し，第5章で全体をまとめる．

2．方法

方法は，3種類のアンケート調査（いずれも2001年12月に実施）と聞き取り調査（1999年8月，2000年8月，2001年8月，12月に実施）である．アンケートは全成人住民対象の意識調査（アンケート①），全世帯対象の民家調査（アンケート②）で，有効回答率は順に70%（73/104人），78%（43/55世帯）であった．配布対象は，実際に居住している住民と地区外に住むが連絡可能な住民とした．さらに，住民には高齢者が多いため，後継ぎである長男（長男のいない家は長女）の意識や実家との関係に注目し，別居長男を対象にアンケート③（有効回答18/36人）を行った．なお，アンケート①，②の配布は郵送で，回収は各戸を訪問し，③は正月に帰省した長男に記入を依頼して，後に郵送にて回収した．回答者の内訳は以下の通りである（表－1，2）．年齢は，ほぼ60才以上（89%）で，居住歴は定住者が過半数であり（58%），帰郷者は50才代以下でその割合が多くなっている．世帯構成員は夫婦のみか一人暮らしがほとんどである．

表－1　回答者の属性（アンケート①）
Table1 Details of response (Questionnaire①)

（人）

年齢	性別			居住歴				
才		男	女	定住	帰郷	結婚来住	来住	不明
30-39	3	2	1		2	1		
40-49	3	2	1		2	1		
50-59	2	2			2			
60-64	9	1	8	4	1	3		1
65-69	11	4	7	4		6		1
70-74	25	16	9	21	1	1	2	
75-79	15	7	8	8	1	5	1	
80-84	2		2	1		1		
85～	3	1	2	3				
計	73	35	38	41	9	18	3	2

表－2　回答世帯の属性（アンケート②）
Table2 Details of response (Questionnaire②)

（世帯）

世帯構成員	屋根材料				計
	茅葺き	トタン	瓦	他	
1人暮らし	2	6	1	3	12
夫婦のみ	7	14	2	1	24
夫婦と未婚の子ら			1		1
夫婦と既婚の子ら	1	3		1	5
無回答	1				1
計	11	23	4	5	43

聞き取り対象者は，久多地区自治会役職者3名，左京区久多出張所職員3名，アンケート回収時の在宅者20名で，計26人の調査結果をデータとして使用した．

3．調査地の社会状況と茅葺き屋根の減少

久多地区は，政令指定都市内にあるが（1949年京都市左京区に編入），山林面積が96%を占める山村地域である．地区は，上の町，中の町，宮の町，下の町，川合町の5つの町からなり，民家は広域に点在している（写真－1）．位置は，京都の中心部から約40km，車で一時間強の距離にある．バスの便は悪く，最寄りのバス停からは約二時間の山道を歩かねばならない．冬場は，大雪のため往来が少なくなる．このような立地であるが道路改良やトンネル開設によって，京都の市街地との往来は安全になり，意識的にも近くなった．市街地への通勤者や，反対に市街地からの通勤者（出張所職員等）もそれぞれ数名みられる．住民が地区外に出かける頻度は，だ

写真－1 調査地区の景観
Pic.1 Landscape in this area
注：2000年8月筆者撮影

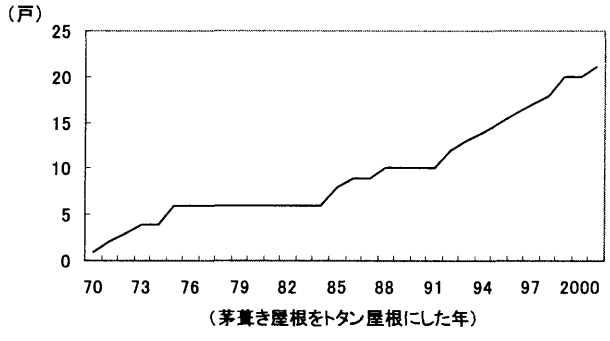
いたい毎日（4％），週に2，3日（31％），週に1回（28％）という人で過半数となり（アンケート①より），地区外との往来は少なくない．

人口は115人で，世帯数は56世帯である（2002年3月1日現在，京都市の集計による）．地区の人口減少は1960年から20年間が顕著であり，現在では老人会（70才以上）は50名にのぼり，高齢化が著しくなった．学校教育施設は地区内に完備していない．高校はなく，久多小中学校は1981年に休校し，1991年に閉鎖した．子どもは小中学生が7名，幼児が3名であり，滋賀県内へスクールバスで通っている．長男の他出理由は，「高校進学のため」が最も多く13名で，「就職のため」が3名であるように，アンケート③の当該質問への回答者16名中，子供は中学校卒業後に都市部に他出したのである．彼らの現住所は，京都市11名，大津市4名，滋賀県1名，京都府2名で，車で一時間圏内にあたる京都市と大津市といった近場が回答者の83％である．さらに，彼らの帰省する機会（複数回答）は，盆や正月（11名），農林作業（8名），祭り（6名），休日のほとんど（2名），月に一回くらいの休日（4名），たまの休日（8名），その他（7名）であり，盆と正月以外にも帰省している人が目立つ(注2)．住民は「子供にいつでも往復してもらえるので安心」というように，高齢者の山村生活を可能にし，家を維持できているのは，子どもの居住地が近く，往来に便利なことも要因のひとつであろう．ただし，住民に対して地区にまず必要だと思うことをひとつたずねると（アンケート①より），「生活環境の整備（バス・病院・水道など）」（71％）が圧倒的に多く，住民は公共交通や施設の不足を強く意識している．続く回答は，「農林業の振興」（16％）や「新しい産業づくり」（4％），「歴史や文化の保護」（4％），「とくに必要なことはない」（4％），「余暇・学習活動の推進」（回答者なし）であるが，それらの割合は少ない．景観に関わる農林地や歴史文化のあり方については，住民の意見としては対策の必要性が聞かれるものの，最優先事項には選択されていないのである．

地区の観光事業は，1981年の新農業構造改善事業の導入に始まる．自治会内には，全戸出資の住民組織である「久多の里整備協会」が設立され，その後すぐに2ヶ所のキャンプ場と，1997年には京都市内初のオートキャンプ場が整備された．そして，高齢者の福祉事業を中心に行う「久多いきいきセンター」では，住民のレクリエーション活動が盛んである．これらの事業は地区住民によって運営されている．しかし，地区の過疎・高齢化については，「危機感を持っており，何かしなければと考えている（危機意識・対策意識）」と答えた人が回答者の約半数（52％）であり，「危機感を持っているが，何かしなければとは考えていない（危機意識のみ）」（30％）とあわせると，80％にのぼる（アンケート①より）．住民からは，このままでは地区は将来続いていかない，しかし，どうすることもできないので不安であるという声が多く聞かれる．

地区の民家は，茅葺き屋根の母屋が14軒（うち別荘1軒，空家1軒，廃屋1軒），トタン屋根（下は茅葺き）の母屋が28軒（うち別荘1軒）である．トタン屋根は1970年に第一号がみられ，1990年代になって急速に増加した（図－1）．

当地区における茅葺き屋根の葺き替えは，住民相互の葺き替え組織がないため，共同作業によることはまれで，各家で職人や業者に依頼してきた．したがって，葺き替えのために住民が担う主な作業は，秋の茅刈りと春の運び入れであり，茅葺き屋根の世帯では，これを毎年行って茅を貯めている．ただ，茅刈りは期間が限定されるので集中的に労力が必要になり，屋根裏への運び入れは高齢者一人では困難である．トタン屋根にした住民のほとんどは，この維持労力の不足が主な原因と答えている



図－1　トタン屋根の母屋の数
Fig. 1. Transition of the number of tin-roofed houses
注：アンケート②の有効回答世帯21軒
注：昭和年次の不明な1軒は1988年に含めた

(アンケート②より)．また，トタン屋根業者の営業もあって，「トタン業者が来てもずっと断ってきた．茅も貯めていたが，高齢化に伴って茅刈りが困難になっていた．屋根が傷んで，そろそろ葺き替えかというときにトタン業者がきた．私も茅葺き残したかった．」と，茅葺き屋根を名残惜しいと感じながらもトタン屋根へ移行したという意見をはじめ，トタン屋根にしたのは「やむを得ず」という意見が多い．

4．住民意識の形成要因

4．1．地域の変化による要因

1）生活状況への危機感と景観への意識

住民に景観に関する質問をした結果は，表－3に示す通りである．景観に関する意見は現在の生活への意見と混合されており，景観の価値は充分にわかっているが最優先には考えられないという状況がわかる．住民に景観のあり方をきくと，高齢化による景観変化への懸念が強く，景観の維持管理と関連させて次世代の必要性を強調する意見が述べられた．そして，家周辺や道の雑草刈りや田畑の手入れの必要性が語られるが，それは，かつて親世代が屋外や田畑の手入れに励んでいたために，現在の住民は昔から続いた生活習慣を大切にしたい，それを続けることが正しいことであると思っているからと考えられる．さらに，伝統文化や自然環境の保存意向や，静かな生活の場である佇まいの評価もみられ，これらの意見からはこれまで残されてきた古いものに対する名残惜しさが感じられる．このように，景観に対する住民意識は，視覚的対象としての景観よりも生活のあり方や生活の姿への意識という側面が強いことがよみとれる．

地区の景観についてみると，過疎・高齢化への「危機意識・対策意識」，「危機意識のみ」を持つ住民は，景観は日本にとって価値があると考えている傾向が強いことがわかる（図－2）．また，歴史や文化を後世へ継承することについては，「ぜひ後世に継承したい」(17%) という強い意向は多くないが，「できる限り継承したい」(48%) と答えた人をあわせると過半数になる．そして，図－3のように，過疎・高齢化への危機感があると考え

表－3　景観に対する意識
Table3 Villagers' awareness of village landscape

属性	意見
	〔山村生活の優先意向〕
男70代	「景観は変わってない。横の茅葺きがトタンになっただけ。景観は重視しているが生きるためには他に必要なことがある」
女70代	「歴史や文化の保存は思ったことがない。久多は道が狭いから観光は無理。はたおりや藍染めはもういい。つくったらつくれるけど、残したいとは思わない。まず学校が必要」
男40代	「久多の景観については非常に重要と考えていまして、景観のことは次に考えることで無理に考えてがんばらなくてもよいと思う。それより住む人があってからだに良い生活空間の建物であれば。木造あるいは茅葺きにサッシの窓はと思うところはありますが個人御大事にするところが違うでしょうから」
	〔次世代の必要性〕
男30代	「高齢者が増えてきて田や畑が少し手が回らなくなってあれた土地が目立ちだした。」
男60代	「今日まで景観は考えたことはなかったけれど、やはりみんなで話し合って出来るだけのことはやりたいが年ですので心配です」
男70代	「久多に若い人がUターンしないと美しい景観が保てないと、それが心配でたまらない」
女70代	「若い子は久多の歴史を継続したいと思うのではないか」
女60代	「若い人が帰って来て久多を守ってほしいと思いますが、仕事がなければそれもむりだと思います」
男70代	「久多の様な山村は日本に多くありますが、林業の不振また都市中心に動いて今の文化・経済・医療・教育が取り残されていて若い人々が生活できないので前途不安である」
	〔手入れの必要性〕
男60代	「田畑の荒廃がひどく景観が悪くなるばかりである。(減反のため)田圃は三年荒らせば水持ちが悪くなり、隣地が荒れたら自分の土地も荒らさねばならない。田舎には田に黄金の稲穂が一番ですね」
男40代	「山里の景観は雑草の刈り取り。むやみに家や道路近くに植木をしないこと。」
女70代	「三日も遊んだら家のまわりに雑草が茂る。お母さんも雑草を刈ってきたのだから刈らないといけない。」
男70代	「高齢者の多い地域となりましたが、力の続く限り自分の体力で出来ることをやって地域の為になる様、努力すべきだと考えています。自分の家のまわりや、自分の土地(田・畑を含む)の保全管理(雑草刈り)に皆励むこと」
男70代	「働ける人は伝統を守らねば。昔から続いたことをほったらかしてはだめ」
女70代	「景観はずっと維持するのが大変だ。久多では遅いですね。茅葺きは10軒くらいしかない」
	〔伝統文化の保存意向〕
男70代	「さびれた昔のままの家が好き。中も改造していない、いろりもおくどさんもそのまま」
男70代	「昔が残っている。いやおうなしに。残されたという方が近い。年寄りは昔懐かしい。慣れているから安心という。」
男70代	「山村っていうのは、残したいな」「文化を残さないとな。なくなれば寂しい」
女80代	「京都の秘境地として、このままでよいのではないか。昔をしのぶのにはよい。」
女70代	「久多はお金がいらないし良い。若いときはいやだった。みる景色がわからなかった。年がいってくると変わる」
男70代	「久多の景観を守らねばならないが将来に向かって発展のためには多少はやむを得ない。」
	〔自然の保存意向〕
男70代	「自然の豊かさを残して生活出来れば最高ですが、時代の進歩に伴い河川・道路・施設の整備が必要であり多少の変化も仕方ないと思います。」
女70代	「空気、お水失うのはもったいない。でも60才以上ばっかりやし」
	〔佇まいの評価〕
男30代	「久多は高雄よりも美しいと考えている。その理由は訪問者が少ないからである」

注：アンケート①自由記述欄「久多の景観についてのお考えをご自由にお書き下さい」、聞き取り調査をもとに作成

ている人のなかに，歴史や文化を「ぜひ後世に継承したい」という強い意向を持つ人がみられる．地区の現状に対する危機感は，過去の活気や生活様式と現在のそれらを比較することによって生まれると考えられるが，こうした危機感を持つ人をみると，その過半数は日本にとって地区の景観は価値があると認識し，地区のもつ歴史文化資源を後世に継承したいと考えていることがわかる．

2）景観保存施策に期待すること

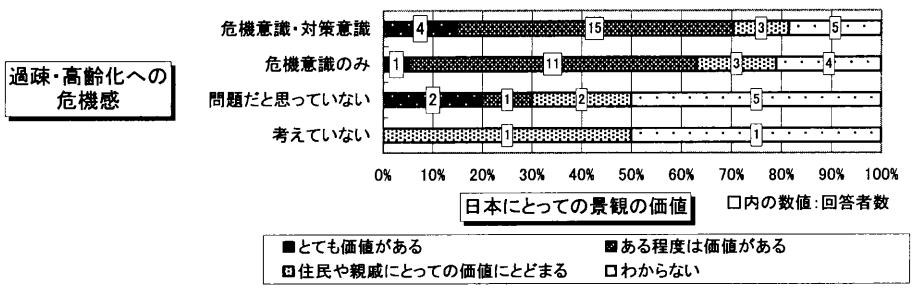
次に，何らかの景観保存施策を講じることに対する意識を明らかにするため，文化庁の伝建地区制度の概要をアンケート用紙に記載した上で(注3)，地区選定を受けた場合を想定してもらった．伝建地区については，「よく知っている」(16%)，「知っている」(33%)，「聞いたことはある」(27%) をあわせると，76%が制度について多少は知識を持っている(注4)．この制度の効果については（複数回答），回答者の過半数が，「新しい仕事が生まれれば後継ぎが帰って来られる」(63%) ことを期待しており，「新しい地域づくりの可能性があってよい」(32%) という新たな展望への期待もみられる（表－4）．しかし，自分の収益となる，「観光関連の雇用ができれば収入が増えること」(25%) への期待は少なく，あくまで後継ぎの仕事の創出が重要視されている．その他には，「訪問者が増えれば交流ができる」(30%)，「屋根の葺き替えや古い家の修理に補助金が出る」(29%)，「愛着のある生活環境を守れる」(27%)，などへの回答もあった．そして，これらの項目のうち最も期待する項目を次の問でひとつ選択してもらったところ，後継ぎが帰っ

表－4　伝建地区になることを想定した場合に期待すること
Table 4. Expectation of benefits on being designated "a preservation district that includes groups of historic buildings" (Questionnaire 1)

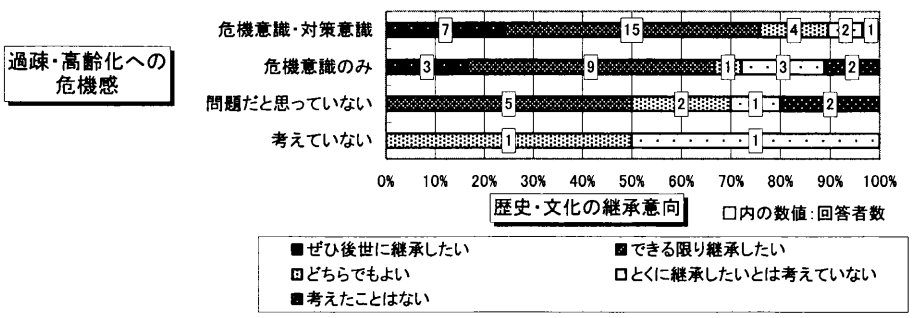
（人・%）

選択肢	人数	構成比
新しい仕事が生まれれば後継ぎが帰って来られる	46	63
新しい地域づくりの可能性があってよい	23	32
訪問者が増えれば交流ができること	22	30
茅葺き屋根の葺き替えや古い家の修理に補助金が出ること	21	29
愛着のある生活環境を末長く守っていけそうだ	20	27
観光関連の雇用ができれば収入が増えること	18	25
歴史・文化の保存ができること	14	19
計	73	－

注：アンケート①より（複数回答）
注：構成比は本問の回答者数（73人）に対する比率
注：質問文「久多が例えば伝建地区のような保存地区になることを想像すると、何を期待しますか。あてはまるもの全てに○をつけて下さい」



図－2　過疎・高齢化への危機意識と日本にとっての景観の価値意識
Fig. 2. Concern for the problems of depopulation and aging of the population, and an awareness of the value of Japanese regional landscapes
注：「過疎・高齢化への危機感」の質問文「山村では，過疎化や高齢化が問題になっていますが，久多の現状をどうお考えですか．」
注：「日本にとっての景観の価値」の質問文「久多のような景観は現在ではめずらしくなりました．この景観は，広く日本の人々にとってどのくらい価値があるとお考えになりますか．」



図－3　過疎・高齢化への危機意識と歴史文化の継承意向
Fig. 3. Concern for the problems of depopulation and aging of the population, and the hope of successfully conserving regional history and culture
注：「過疎・高齢化への危機感」の質問文「山村では，過疎化や高齢化が問題になっていますが，久多の現状をどうお考えですか．」
注：「歴史・文化の継承意向」の質問文「久多に残る歴史や文化を，後世に継承することについてどうお考えですか．」

て来られる（57%）ことに集中し，次に，「愛着のある生活環境を末永く守っていけそうだ」（14%），「新しい地域づくりの可能性があってよい」（10%）と続いた．住民の大半を占める高齢者は，高度経済成長期における山村の社会変化のなかで生きてきた人々である．住民は，後継ぎの確保を願い続け，景観保存の施策に対しても，将来的に地区に活気がもたらされるための方策としてなら期待すると考えられる．

4．2．地域外からの評価による要因

1）訪問者の評価

当地区を訪れる訪問者にとって，狭い山道を抜けると唐突に視界にひらける山里は，都市とは違ったのどかで非日常的な空間である．かつては，「今から10年前は知られていなかった．京都の北海道といわれたことがある（60才代男）」という住民や，「久多地方は現代でも民俗学者らにとっては“日本のチベット”ともいえる貴重な存在」（今井　1968）などと表現された．また「地元の人たちはここをどん詰まりの村と呼ぶ」（熊谷　1986）というようにかつては住民も奥地であることを意識してきたとされる．そこで，アンケート①で，地区を知らない人に一言で紹介するならどう表現するかを質問したところ（ひとつ選択），「山里・のどかな暮らし・安らぎの里」（58%）と「山奥・秘境・自然地」（32%）におよそ二分された．現在では，住民にとっては奥地や僻地ではなく，生活の場としてのイメージが強い．その他の回答は，「かくれ里・落ち武者の地・ひなびた地」（7%），「木材の産地・炭焼きの地」（回答者なし），「その他」（3%）となっている．木材の伐出は，昭和30年をピークにその後は減少し，近世から盛んであった久多炭も昭和54年以降は消滅しており（半田ら　1985），盛んであった林業は，住民にとって現在の地域イメージを代表するものではなくなっている．

ここで，地域外からの評価と住民意識との関係についてみると，過半数の住民は地区をほめられた経験があり（表－5），それは20年前くらいから増加傾向にあることが読みとれる．地区がほめられてきたこの時期は，図－1に示した茅葺き屋根の減少していった時期と重なっている．ほめられた相手（複数回答）は，観光客（40%），町に住む知人（25%），親戚関係（5%），研究者（2%），その他（3%）であり，地区への外部評価は観光客から伝えられることが多い．観光事業が運営されてきたために，「キャンプ場の管理人をやっているのでお客さんからほめられる（70才代女）」という住民もいる．

ただし，外からの見られ方に対しては，「気になる」（9%）「ある程度は気になる」（35%）という人をあわせて44%に達することは注目されるが，「あまり気にならない」（46%）「全く気にならない」（9%）人も同程度で，意識は分かれており，住民全体に外部評価を受けとめる素地があるとはいえない．例えば，「ほめられたのはここ最近やろうなあ．外の人はいいところばかりみているがいつもいいことばかりではない．たまに来るからいいのだろう．私は毎日みていていいと思うけれど．夏は涼しい，秋は山がきれい．夏はいろんな人がきはる．写真を撮りに．そういわれるといいところやなあと．でも，久多のことを知らない人には価値がわからないのではないか（70才代女）」といった，外部評価は住民の意識とは違うという意見もある．

また，地区の景観は日本の人々にとって，「とても価値がある」（12%），「ある程度は価値がある」（42%）と考えている人を合わせると過半数になるが，「住民や親せきにとっての価値にとどまる」（15%）「わからない」（31%）という人もまた多い．外部からの評価によって景観への価値意識を持ち始めている人がいる一方，「久多はいいなあと思って住んでいる．外からどうみられているかは考えたことがない（80才代女）」，「（日本のふるさとについて）そこらじゅうにいいとこあるから，そう思わない．（見られることについて）よそはよそや（70才代女）」といった，ほめられるほどの場所ではないという意見もあるように，ここでも住民意識は分かれている．地区の景観は日本の人々にとって価値があるといった，外部から良いと見られている意識は住民の全体に備わっているわけではない．

ただし，1995年のアンケート（伊藤　1996）によると（当地区の全成人住民115名対象，回答者77名），住民が考える久多の良さは（複数回答），「空気がおいしいこと」，「水がおいしいこと」，「豊かな生活」という自然の恵みに関することをあわせると36%で，「ゆったりした生活」，「静かな生活」という生活関連が22%であり，「自然景観」，「茅葺き屋根」といった景観に関することが26%であった．しかし，都市住民に知ってもらいたいことになると，

表－5　久多についてほめられた経験
Table 5. Experience of being commended for the village landscape

（人・%）

選択肢	人数	構成比
ずいぶん昔からほめられてきた	5	7
ここ20～10年くらいによくほめられるようになった	18	26
ここ数年の間にほめられるようになった	22	32
あまりほめられたことはない	17	25
わからない	6	9
計	68	100

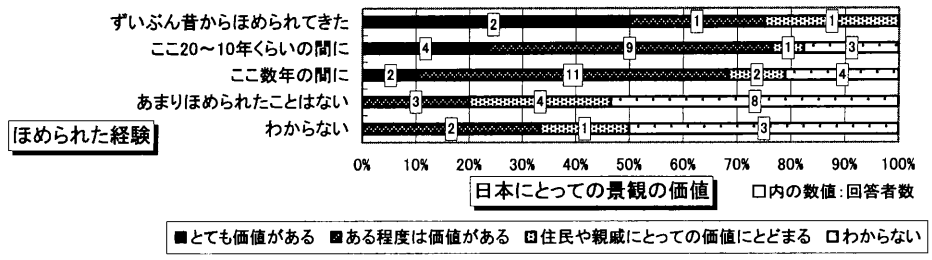
注：アンケート①より（ひとつ選択）
注：質問文「よその人から、久多についてほめられたことがありますか。ひとつに○をつけて下さい」

「自然の恵み」,「豊かな生活」という自然の恵みに関することが17%,「静かな生活」という生活関連が12%に減少するのに対して,「自然の美しさ」,「山村風景」という景観に関することが32%と多くなっている．当時すでに，地区の景観についてはみられる対象であるという認識が少なからず持たれていたことがわかる．

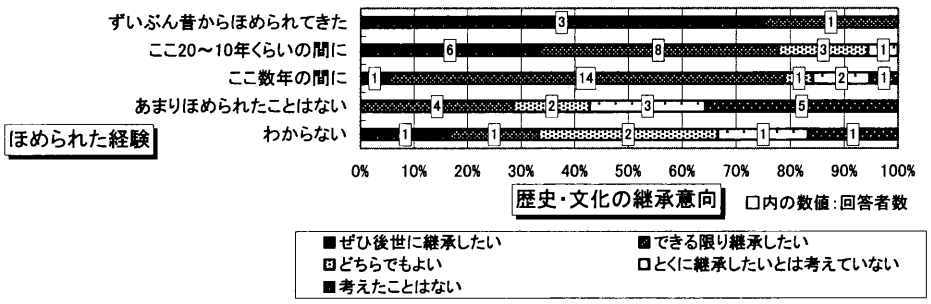
そして現在では，昔からほめられてきた住民ほど地区の景観は日本にとって価値がある（図－4），また，ぜひ後世に継承したい（図－5）と考える傾向のあることが注目できる．さらに,「久多は日本のふるさとといわれることがあります．これについてどう思いますか」の質問には，半数が「そうかもしれない」(47%)，19%が「そう思う」と答えているが，ほめられてきた住民ほど「日本のふるさと」であると考える傾向がみられる（図－6）．民宿を営む住民は,「日本のふるさととは，ものを書くときにそう書いたのではないか．確かに室町からあった村だから古い．かやぶき民家を探して写真を取りに来る．新聞社などが，あらゆる写真を撮る．日本にとっての価値は，地元の人にはわからなくても他からのひとはそう思う．だんだんこういうとこが少なくなってきた．お客さんとは一緒に昔を思い出す．娘時分ありましたねえって．みんないいとこやなあと．古いところへきて,『これは何と懐かしい』といって反対に色々教えてくれる．ここにおったら気付けへんのや．ここにいたら，普段一緒やから，でもそういう人が方々から来てくれる．都会の話など色んな話聞かせてくれる（70才代男)」という．これは，近年では観光客の評価が地区を客観視する要因になってきていることを表す意見である．

2）他出した子供の評価

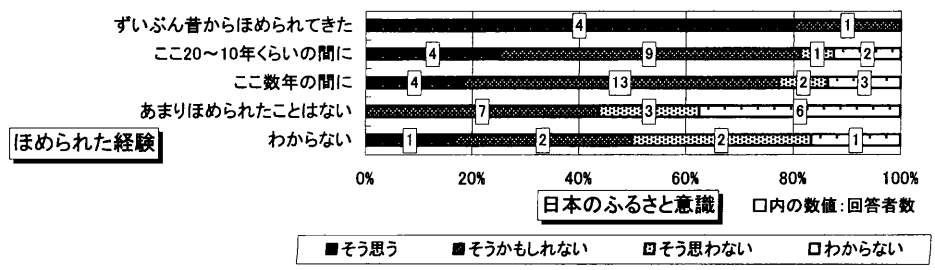
他出した子供は，生まれ育った場所を都市生活からの目線でみている．こうした子供の意見は住民にとって強



図－4　ほめられた経験と日本にとっての景観の価値意識
Fig. 4. Experience of being commended for the village landscape, and an awareness of the value of Japanese regional landscapes



図－5　ほめられた経験と歴史や文化の継承意向
Fig. 5. Experience of being commended for the village landscape, and the hope of successfully conserving regional history and culture



図－6　ほめられた経験と日本のふるさと意識
Fig. 6. Experience of being commended for the village landscape, and an awareness of regarding the village as an archetypal home village for Japanese
注：「日本のふるさと意識」の質問文「久多は日本のふるさとといわれることがあります．これについてどう思いますか」

い説得力を持つ外部評価のひとつであると考えられる．地区の過疎・高齢化の現状については，長男のほとんどが，「危機感があり何とかしなくてはと思っている」(13名)，「危機感を持っているが，何かしなければとは考えていない」(3名) と答えている (アンケート③より)．これらの回答は住民より高い割合であり，他出した子供も地区の将来を案じているといえる．また歴史や文化を継承したいという意向も，「ぜひ後世に継承したい」(4名)，「できる限り継承したい」(9名) を合わせて13名で，これらも住民より高い割合である．そして，久多の景観は日本にとってどのくらい価値があるかについては，「とても価値がある」(5名)，「ある程度は価値がある」(7名) をあわせて12名と大半であり，「住民や親せきにとっての価値にとどまる」が1名，「わからない」が4名であるように，景観への価値意識は大変高い傾向がみられる．

茅葺き屋根の保存についても，トタン屋根に移行した住民からは，「嫁いだ長女は茅葺きが好きで，トタン屋根に反対した」，「トタン屋根にするといったら息子が反対し，茅刈りを手伝いにくるといったが暇がなかった」という子供とのやりとりが聞かれた．これは，子供は茅葺き屋根の保存の希望を親に伝えたが，実現しなかったことを意味する．また実家の維持について，「家のまわりまで草がよせつけるようになり，草原の一軒家になることに心配している．(30才代男)」と，現状の維持管理を心配しているが草取り作業は担っていけないと思っている人や，実家への帰郷を予定しているが，「自分の両親が居る間は今のままで家屋の存続をしようと思っているが，もし私の代になったら続けられるかわからない．(40才代男)」というように，帰郷後は家屋を建て替える可能性のある人もいる．このように，他出した長男には，住民と同様に地区のことを心配しており，景観の継承についての意向も強いが，実際に維持管理をする意欲は強くない人がみられる．

次に，住民と同様に長男に対しても伝建地区の制度を想定してもらい，期待することをたずねたところ (複数回答)，「歴史・文化の保存ができる」の回答が多いことが住民とは異なる特徴である (表－6)．そして，帰郷しても就業するのは困難という山村特有の問題に直面しているのは住民と同様であるが，6名が「新しい仕事が生まれれば実家に帰ることができる」ことを期待していることが注目される．これは，現在の地区の産業状況において新規就業は現実的ではないが，景観施策によって仕事が生まれた場合，後継ぎが定住する可能性があることを示している．

ところが，すぐに観光事業を始めたいという意向は強くないと思われる．それは，地区の景観に関して，「久多も大変高齢化が進み，茅葺きを維持していく家が減っているのが現状です．久多地域の人々の多くは歴史ある家の保存は必要であると思っていると考えられますが，費用がかかり，次々と瓦葺きや瓦鉄板葺きに変えていっておられるのが現状で，一部保存しても観光に結びついていくものではないと思います．(40才代男)」，「久多には茅葺き屋根の家が残っているが，各家の努力によって保存されている所が大きいので，今後ますます少なくなっていくのではないか．仮に久多が伝建地区に指定されたら，家の廻りには物を置いたりできないようになり，農業，林業よりも観光地として発展していかなければならなくなりそうに思う．(40才代男)」といった消極的な意見が述べられていることによる．

表－6　伝建地区になることを想定した場合に期待すること(長男)
Table 6. Expectation of benefits on being designated "a preservation district that includes groups of historic buildings" (Questionnaire 3)

(人・%)

選択肢	人数	構成比
歴史・文化の保存ができること	8	50
茅葺き屋根の葺き替えや古い家の修理に補助金が出ること	8	50
新しい地域づくりの可能性があってよい	7	44
新しい仕事が生まれれば実家に帰ることができる	6	38
観光関連の雇用ができれば収入が増える	6	38
愛着のある生活環境を末長く守っていけそう	4	25
訪問者が増えれば久多での交流が活発になる	2	13
計	16	－

注：アンケート③より(複数回答)
注：構成比は本問の回答者数(16人)に対する比率
注：質問文「久多が例えば伝建地区のような保存地区になることを想像すると、何を期待しますか。あてはまるもの全てに○をつけて下さい」

そして，彼らは外からの見られ方はあまり気にしていないことがよみとれる．久多が外からどのように見られているかは，「気になる」(1名)，「ある程度は気になる」(4名) と考える人より，「あまり気にならない」(10名)，「全く気にならない」(2名) と考えている人の方が多く，地区で暮らす親たちの方が見られ方を気にかけているという結果である．地区を「日本のふるさと」と思うかどうかについても，「そう思う」(2名)，「そうかもしれない」(6名) の回答と，「そう思わない」(4名)，「わからない」(4名) の回答は同数であり，住民と比べると「日本のふるさと」とは考えていない傾向がみられる．

これらの結果をみると，他出した次世代は地区の景観は日本にとっての価値があると答えていても，日本のふるさととしてというよりも，自分のふるさとだという心情が強いのではないかと考えられる．それは，「大切なふるさとであり伝統のあるところなので，思いつきや場あたり的な施策にまどわされず，住民の考えを第一義に，景観については自然にマッチした対策を講じていただきたい．大切な久多を守ってほしいし，守りたい．(40才

代女)」という意見にもみてとれる．そのため，地区の景観や歴史，文化を残したいという意向も，外部評価のためでなく，自分の実家やふるさとであるという個人的な場としての思いによると推察される．

5．伝統的景観への住民意識

住民は，地区の最優先の課題は生活環境の整備や過疎・高齢化の解消であると考えており，景観の保存施策に対して期待することは，これによって後継ぎが確保できることである．住民にとって景観の維持継承は，生活の必要性の中では最優先に考えられない課題なのである．ただし，住民は景観を継承していく意向を持っており，現在は過疎・高齢化への危機感の意識にかくれて，表面化していないだけである．近年，都市住民から茅葺き民家が伝統的な景観と評価されたり，地区の社会が変化過程にあるなかで，住民は希少になる地域の景観の価値やそのあり方への意識を形成しつつある．本研究の結論として，当地区の景観に対する住民意識の形成には，次の2点が大きな影響を与えていることを指摘する．それは,①住民は山村問題を実生活で体験してきたために，過去の活気ある時代と現在を比較して地区の景観を評価していること，②観光客の評価を理解することで住民が自ら生活する地区を客観視し，他出した子供の評価によって価値意識を高めていること，である．当地区の住民は，生活の場の内部変化とともに主観的な見方を持ちつづけながらも，近年では外部評価を認識しつつあり，客観的な見方が備わってきている段階にあることが示唆される．つまり，住民は，地区の過去との比較（愛着）と外部からの評価（評判）の両方を認識しているのである．このことは,山村問題の要因が山村の社会経済の変化と，都市や都市住民との相互作用との双方にあるように，景観への住民意識もこの二つの軸からみることでより明らかになることを示している．

最後に，当地区における伝統的景観の継承に向けた今後の課題について住民意識から考察したい．住民は外部からの評価を受けることによって，地区景観に対する客観的な認識を形成しつつあるが,住民に比べて次世代は，地区の景観が外からみられて，価値評価を受けているという認識が薄い．したがって，こうした次世代に地区住民の意識を伝えて，次世代とともに将来へ向けた取組を行うことが重要であると考える．それは，伝統的な民家の継承は，次世代への継承と密接に関わるものであり，民家を含めた地区景観の継承に対する意識の高まりによって，地区での生活を継承していく意識の高まりや新たな産業の模索へと発展することが，とくに次世代において期待されるからである．これは，現在の住民や他出した次世代にとっての本当のふるさとが崩壊する前に始めることが求められる.当地区のような高齢山村において，現在はこのような可能性に期待できる最後の時期である．

本研究にあたり，久多地区の皆様には，大変お世話になりました．田中好弘所長（当時）をはじめ久多出張所の皆様，ならびに上河原善氏，小瀧忠雄氏，小阪源逸氏ほか，アンケート調査および聞き取り調査に快くご協力いただきました住民の皆様方に，心よりお礼申し上げます．

注および引用文献

注1　文化庁の重要伝統的建造物群保存地区（60地区）には6地区の山村集落が選定されている（2002年2月現在）．

注2　回答者以外は正月に帰省せず（従って，アンケート票を受け取らなかった），あまり帰省していない可能性が高いことは注意すべきである．

注3　アンケート用紙に記載した説明文「伝建地区とは，文化庁が，歴史的な景観に対して選定するものです．これらの地区では，住民が一体となって景観を守るさまざまな取組みをしています．それに対して行政は，茅葺き屋根の葺き替えや歴史ある民家の修理に，補助金を交付するなどの支援をしています.」

注4　これまで当地区では景観保存の話は持ちこまれていないが，近接する京都府美山町北が伝建地区に選定されており，美山町に見学や観光に行ったという住民がいることから制度が知られていると推測される．

1）赤尾健一（1984）1960年代以後都市近郊山村の変貌－京都市左京区久多地区を一事例として－．京都大学農学部林学科卒業論文，85pp
2）半田良一・森田学（1985）久多地区の産業と生活．243-274（八丁平環境調査報告書．四手井綱英代表，274pp，京都市経済局農林振興室林業振興課）
3）今井幸彦（1968）日本の過疎地帯．200pp，岩波書店．東京
4）伊藤やす絵（1996）久多地区におけるグリーンツーリズムの受け入れ意志についての分析．70-95（京都市北部山間地域における滞在型ツーリズムの可能性に関する研究．京都大学農学部森林経理学研究室，137pp）
5）岩松文代・藤掛一郎（2000）山村集落における伝統的景観保存への住民の反応－京都府美山町における伝建地区指定を事例として－．森林研究．72．25-33
6）岩松文代・岩井吉彌（2001）山村集落の活性化に関する合意形成と住民リーダー－京都府美山町における景観保存を事例として－．日本林学会誌．83(4)．307-314
7）熊谷栄三郎（1982）新ふるさと事情．258pp，朔風社，東京．
8）前田直之・後藤春彦・佐久間康富（2001）交流観光による茅葺き民家集落保全の住民意識から見る課題と展望－新潟県刈羽郡高柳町荻ノ島集落を事例にして－．第36回日本都市計画学会学術研究論文集．361-366